

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 102 号
2017年 10月



第 153 回 東吾妻山夏の山岳植物観察会

7月9日(日)に景場平から東吾妻山頂までの山岳植物観察会を実施しました。参加者は13名でした。当日は好天に恵まれ、いつもながら女性会員主体の参加者で和やかな雰囲気の中で景場平を目指して出発しました。

登り始めるとそこはオオシラビソやコメツガに覆われた亜高山針葉樹林帯となります。林床に転がる岩の表面には幾種類かのコケが着生し、深山の雰囲気を高めています。そのコケ類の中でも茎の先端に造精器を付けたコセイタカスギゴケが目につきました。近くには孢子体を伸ばした群落も見られ、コセイタカスギゴケが雌雄異株であることが確認できました。コセイタカスギゴケは吾妻連峰の稜線では良く見られますが、造精器を付けた個体には気づくことはありませんでした。観察会だからこそその出会いと言えるでしょう。

景場平ではワタスゲやチングルマなどは既に結実の時期をむかえ白い綿毛や色づき始めた毛輪を風になびかせていました。そんな中で葉の表面から伸びた真っ赤な腺毛で真っ赤な昆虫を捕えたモウセンゴケの美しさが際立っていました。景場平からの長い急登を何とかしのぎ全員無事に東吾妻山頂にたどり着くことができました。姥ヶ原を経由して下山の途に就きましたが、そこでも思わぬ発見に恵まれましたが、それは参加者だけの思い出としておきましょう。



造精器を付けたコセイタカスギゴケの雄株



先が丸い朱赤色の腺毛を纏ったモウセンゴケに同色の昆虫が捕捉されていた

東吾妻山観察会に参加して 小林悦子

7月9日(日)に東吾妻山観察会に初めて参加させていただきました。14, 5年前には何度か山登りもしていたのだが、同行する人も無く、体力の衰えも感じ、仕事の忙しさを理由にして遠のいていた。でも、山の素晴らしさは肌で感じていて、特に登りで立ち止まって振り返った時にさっと吹いてくる風の心地良さは何ものにも代えがたい。至福の瞬間である。それを味わいたくて参加させていただいた。が、やはり体力に自信がない。大丈夫だろうか？皆さんに迷惑をかけることにならないだろうか？と不安な気持ち一杯だったけれど、「この会は花や木々を観察しながら何度も立ち止まって登るから、いつの間にか頂上へ着いていますよ」と励まして下さいました。本当に頂上まで登れた。嬉しくてめったに自分の写真は撮らないのだが、東吾妻山頂上標高1974. 7mをバックに証拠写真を撮ってもらい、早速子供たちにLINEで自慢してしまった。

また、今回の山歩きで嬉しかったことは今まで“きれいな花だな”で終わっていた花々の名前や生態を詳しく教えてもらったこと、10分の1も覚えられなかったけれど、これからは見方が変わるだろうと思うと自分の成長が楽しみだ。きっと心優しく綺麗になると。(少し遅かりし・残念。)

そして驚いたことに、私のFB友達に長靴で登山をする方がいるのだが、今回のベテランメンバーに3人も長靴の方がいらっしやった。思わず尊敬の眼差しで見ていることをご存知だろうか？メンバーの皆さんの服装、携帯されている物(ループ等)、博識、何もかも驚きと新鮮さを感じた。黙々と山があるから登る登山も悪くはないが、自然に触れ何度も立ち止まり感嘆するこのような山登りもいいなと喜び勇んで下山に向かった。と、ここまでは良かったのだが、やはり心配した右膝が下りの振動で痛み出した。ひたすら迷惑をかけられないと思いつつも、ストックを2本お借りしてゆっくり下る。でも、どうい置いて行かれる速度だけど、幸いに観察会は続いていて皆さんが立ち止まる度に距離が縮まり何とか下山できた。嬉しい。すごい達成感。

景色の良い景場平での昼食は、おにぎりしか持っていなかった私も、皆さん手作りのご馳走を頂戴して山の上とは思えない豪華さにまたまたカルチャーショック。

本当に参加させていただきありがとうございました。とても楽しかったです。



オオシラビソ林は幻想的です



景場平と東吾妻山



快適な湿原散歩



ワタスゲの白い綿毛が涼感を呼びます



ガクウラジロヨウラクの赤い腺体



頂上直下の湿原で昼食です

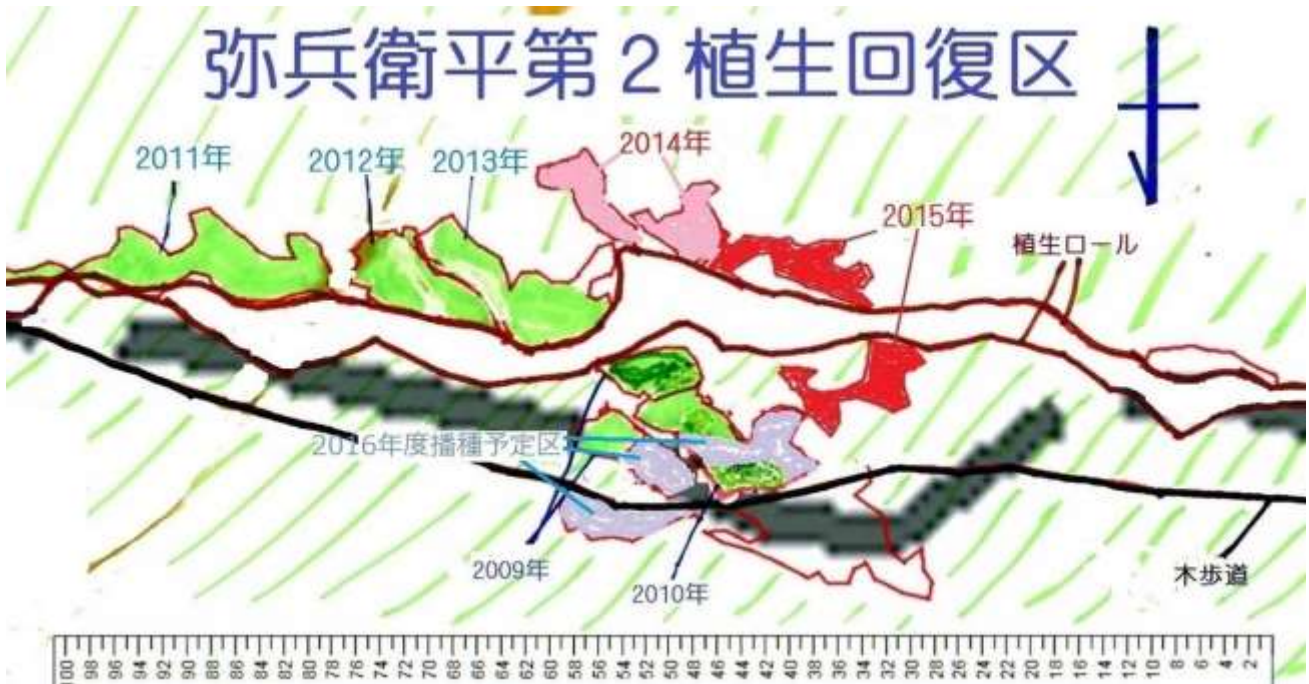


色づき始めたチングルマ

特別寄稿 弥兵衛平の環境保全活動をふりかえる（４）

ネイチャーフロント米沢 代表 青柳和良

5. 複雑な地形に悩まされる 2011 年度からの取り組み



上の図は、第2植生回復区に手を付けた2009年度から昨2016年度まで緑化に取り組んだ場所の模式的な図です。この頃になると対象とする荒廃地が広いこともあって、どこか定点に立って見取り図を描くことがほとんど不可能になってきました。

私たちは、ある会員が別の目的で使っていたGPSの軌跡機能を使ってみることにしました。慣れないために散々苦労しながら何とか描き上げたのがこの図です。ただしこのGPSは古くなって今年では使えなくなったため、より信頼度の高いGPSを購入することにしました。

図で黒褐色の2本の線(植生ロール)に挟まれた無色のままの細長い土地は礫や岩石や火山灰などが露出して水路になっているところで、私たちの作業対象にはなっていません。それぞれ年度番号がついて着色されている土地が各年度の対象区です。

どの年度の対象区も奇妙で複雑な形をしています。いずれも雪解け水や大雨の際の表流水が岩石や樹木に阻まれながら湿原の植生や泥炭を侵食した結果このようになったものと推測されます。したがって、裸の泥炭地と言っ

ても、小川の法面のようにになっているところもあれば、池塘が崩壊して裸地化しいつまでも水が引かないところもあります。その様な所に同じ形式で播種やマルチングをしても簡単に緑を再生することはできません。環境の個性に合わせた手立てが必要なのです。私たちは今文字通り試行錯誤を繰り返しながら少しずつ進んでおりますが、うまくいかなかった例を挙げてみます。



左の写真は、2011年度の作業風景ですが、植生ロールで区切られた横長の裸地部分に人々が集中して作業を行っています。この年は、タネを散布し、その上から緑化ネット2枚で覆い、一番上に防霜用の菰をかけました。(一部で菰が不足して緑化

ネットのみのマルチングとなったところも生じました。)

翌年の発芽は部分的に見られる程度で、不良でした。下の写真は 2012 年 7 月の撮影ですが、菰の隙間から細い稚苗が目を出しているところです。しかし前年度播種区の 70%程度でこのような芽生えが見られませんでした。ここでの経験を積んだある会員の指摘で、この区域は雪解けシーズンや大雨の時、溢れた水流によって種子や稚苗が洗い流されている可能性があることを知りました。



それでもこの年(2012年度)の新工夫をした播種が行われた際には、2011年度播種区にも左の写真のように防霜用の菰を前面に被せることを怠りませんでした。(以下次号)

吾妻山周辺森林生態系保護地域における現地検討会報告

9月26日に西大巓から西吾妻小屋までの登山道崩壊状況の現地検討会が実施されました。当会では2010年に環境省、森林管理署、福島県に西吾妻山城登山道周辺の植生崩壊に対する対応を要請してきましたが、この度、窓口となった置賜森林管理署の計らいによって実現したものです。置賜森林管理署、環境省裏磐梯自然保護官事務所、会津森林管理署、会津森林管理署小野川森林事務所、山形県置賜総合支庁保健福祉環境部環境課の各機関が参加しました。



西大巓からの登山道崩壊状況

西大巓山頂直下の斜面崩壊状況や水場周辺および西吾妻湿原のロープ設置による登山者立ち入り抑制による裸地化防止状況などについて説明をしながら、当該地域の団体登山による登山道のオーバーユース問題や西吾妻小屋までの山城の行政的な管理責任者が未確定であること等について参加機関の理解を求めました。最後に、今回の取り組みを機に、関係機関の意思疎通をより深めていくことを確認して散会しました。

今回の現地検討会は非公式なものですが、国および県の行政機関が一堂に会して意見交換ができたことは、2000年からの当会の取り組みの中でも大きな成果であると思います。



西大巓山頂直下の斜面崩壊



斜面崩壊状況を確認する関係機関参加者

鹿狼山から41 ～再びミズアオイ～

小幡 仁子

今年9月、稲刈り前の田んぼを見に行ったら「ミズアオイ」が再び咲いていた。去年は咲いていなかったのにどうしたことだろう。ミズアオイを初めて見たのは2年前の事であった。稲の中に何か青い物があるので不思議に思ってみてみたのだった。その青紫の美しい花ミズアオイは、昔は水田雑草として嫌われ、昭和30年頃に除草剤で駆除されてからはすっかり姿を消してしまったという。この話は実家の父から聞いたことである。去年は咲いているかと思って見に行ったら跡形も無く、代わりにこのあたりでは「オトゲナシ」と言われるオモダカが咲いていた。今年はどうなっているだろうと思って田んぼに行ってみたのである。そうしたら、ミズアオイも、オモダカも両方一緒に咲いていた。

近くの田んぼはどうなのだろうと思って、道路向かいの田んぼを見たら、オモダカが沢山あった。田んぼの畦に立て札があって「特別栽培農産物圃場・農林水産省新ガイドラインによる」と書いてあった。この田んぼは「特別栽培農産物圃場」であることが分かった。

「特別栽培農産物」「農林水産省新ガイドライン」とは何かを調べてみた。特別栽培農産物は「科学的に合成された農薬及び肥料の使用を低減したもの」とあった。ミズアオイやオモダカが田んぼの中にあるのは農薬や除草剤を低減しているからということなのだろう。

科学的に合成された農薬及び肥料の使用を低減した農産物は、身体に良いに違いない。実家の父も、畑で虫が沢山付いたりすると消毒をしている。「消毒をしたばかりだから、今はまだ食べられない」、「これは消毒したからよく洗って食べろ」、「消毒はしたくないが、先に虫にやられてしまうから」と言っている。キャベツの類はすぐ青虫にやられるから、父は捕虫網でチョウチョを捕ったり、薄い寒冷紗を掛けて虫が付かないようにしている。畑は雑草と虫との戦いだ。田んぼも同様と思う。

ミズアオイの茎は里芋の茎に似ていた。しっかり土の中に根を張っているようだった。(写真の奥に切り取られた株の跡がある)数十年前、除草剤が無い時代にはこれを人力で除去していた訳だから、さぞかし大変だったことだろう。自然と向き合ってやっと収穫したお米の価値は計り知れないものだったと思う。

さて、この日、私は「ウミドリ」はどうなったことだろうと思い海岸方面にも行ってみた。常磐線は6年前の大津波で破壊されてから、少し内陸に移動し、昨年12月に再開した。常磐線跡は高く嵩上げされ、堤防のようになっていた。これは海沿いを南北に走る道路になる予定だ。工事車両が入り溝が掘られて、ウミドリを確認することはできなかった。ウロウロと歩いていたら小さな流れにミズアオイが咲いているのを発見した。近くにある水草が何であるかは分からなかった。オオフサモかホザキフサモかもしれない。

昔は、このような湿地には普通にミズアオイは咲いていたのだろう。津波により人が作った物はすべて流されてしまい、その後に最初に蘇った物は以前の自然のままの姿なのであろう。この場所も今後はどうなるのか分からない。

それにしても、種子というものは強い物だ。中尊寺ハスもそうだが、再び花咲ける環境を待って土中に眠っているわけだから (2017/09/18 記)。



田んぼの中のミズアオイとオモダカ



田んぼにあった立て札



常磐線跡は道路になる予定



湿地のミズアオイ

東北ブナ紀行（63）

奥田 博

昔話だが「山形50名山」（山形新聞社）という本を出版したことがある。その頃、山を選ぶ基準に「森」という概念は無かった。今は花も森も、その良さが分かるが、当時は「花」にしか目が向かなかった。今でも、同じ視点の方が見受けられるのは、同じ道を辿っているのだろう。今回紹介の2山は、無名だがブナ林の純度は高い。

9 1) 五段山 1312m

五段山とは無名な山だが、飯豊連峰の東端、福島・山形県境にある。登山口は山形・飯豊町だがブナは県境の尾根に見られる。

川入から奥に開削された飯豊檜枝岐線林道は、開通直後に大雨で通行止めになってしまった。やっと再開した昨年、走って見たら林道とは程遠い観光道路。こんな道路が全国展開されている「大規模林道」の実態だ。

飯豊トンネルを越えた所にある登山口に車を止め、歩き始める。沢を渡るといきなりの急坂が始まるが、もうブナ林。尾根の近くで次第に緩くなって尾根に乗ると立派なブナが現れた。尾根からは断続的に並木状にブナが連なっていた。山頂近くではさすがにブナは矮少化して厳しい飯豊稜線を思わせた。五段山に上がると飯豊本山が眺められた。

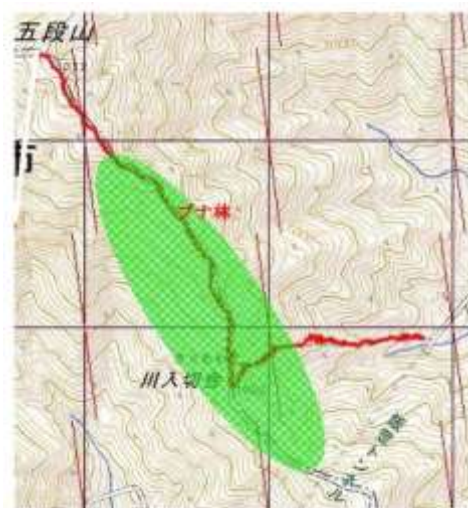
コースタイム：トンネル出口登山口（45分）尾根（1時間）五段山（30分）尾根（30分）登山口

9 2) 姥ヶ岳 1670m

月山・姥ヶ岳の南山麓には山形県でも有数のブナの森が広がる。ここはもっぱら積雪期に山スキーで訪れるエリアであった。ある冬、悪天候で姥沢からスキーで石跳川に向かって滑り降りたら、ブナの粒が揃っていることに気付きいつか新緑の時期に歩きたいと思っていた。調べると夏道があることが分かり、出掛けた。

初夏の晴れた日、ネイチャーセンター前に車を置いて、石跳川～湯殿山コル～姥ヶ岳を経てネイチャーセンターへ下った。その姥沢から下りに訪れたのがブナの森。一步はいると健やかなブナの森に歓迎を受ける。ここからはブナの森歩きに終始する。水場が時折現れるのはブナの森の特徴か。後半は、ネイチャーセンターの管理する遊歩道が整備され、野鳥の観察小屋やブナを始めとした動植物の解説板などが見られた。大ブナも多く、堪能しながら下ると「月山清水」と印された湧水が流れ出していた。もちろん冷たく、美味しい水で、テルモスに詰めて、帰路飲みながら帰った。ブナの森の贈り物に感謝の一日だった。

コースタイム：姥沢（30分）沢横断（30分）観察小屋分岐（30分）月山清水（20分）ネイチャーセンター（全て下山）



(写真左) 尾根に並木状に連なる五段山へのブナ林
(写真右) 大木の元、休みたくなるブナ広場

エゾユズリハ (*Daphniphyllum macropodum* subsp. *humile* ユズリハ科ユズリハ属)

吾妻連峰のブナ林下で見られる代表的な常緑樹。ハイヌガヤ、ヒメモチ、ヒメアオキ、ツルシキミと併せて多雪地のブナ林を構成する基本的な林床要素。これらに加えてユキツバキもあるが、吾妻・安達太良連峰には自生しない。

葉は互生だが、枝先は叢生し輪生する。ユズリハに似るが、側脈は8~10対でユズリハより少なく、質はユズリハより薄い。葉身は長楕円形で先端は尖る。葉縁は全縁。葉の表は光沢があり、裏面は緑白色。

花は腋性である。雌雄異株で、雄花と雌花をつける株に分かれる。葉腋に多くの総状花序を着生する。小花はガクと花弁を欠く。雄しべは1小花につき7~9個着生する。1つの雄しべは2つの葯を持つ。葯の色は赤紫色を帯びる。雌花は酒樽のような子房の先に2~4個の紅色の柱頭が反り返る。退化した仮雄しべが子房の基部に着いている。雌花の柱頭の形状は鶏冠のようでもあり、唇のようでもある。開花時の花の姿は花弁がないにも関わらず華やかで目を引く。開花期は先端の若葉の色がまだ萌黄色を残す頃で、紫外線が強い時期である。柱頭や葯を色素で紫外線から守り、種の保存を確保するための戦略なのかもしれないが、柱頭が赤い植物はヒメモチ等ごく一部で多くはない。柱頭に色素を持つ植物は、何か特別の事情があるのだろうか。

高山の的場川にいたる途中のブナ林で3本が並んでいた真ん中のブナが自己間引き現象により倒れた。できたギャップの光の恩恵を受けるのはどのような植物か観察しようと訪れたところ倒木から2年を待たずその林床はエゾユズリハによって埋められていた。ユズリハがめでたい木とされるのは、このような成長力の旺盛さが着目されたからかもしれない。



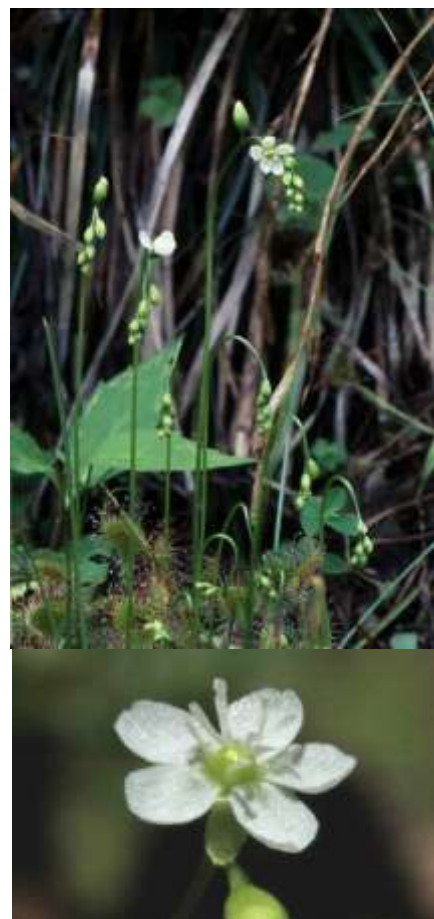
モウセンゴケ (*Drosera rotundifolia* モウセンゴケ科モウセンゴケ属)

山地の湿地や亜高山の高層湿原に植生する多年生の食虫植物。モウセンゴケの仲間には北極を中心として環状に分布しており、周極分布と呼ばれる。周極分布する植物には高山植物が多いが、モウセンゴケは比較的低位の湿地にも植生し、適応性が広い。名前が「コケ」となっているが、繁殖を種子で行う種子植物である。属名は「霧を帯びた」の意味で粘液を分泌した様子を表し、種小名は円形の葉を表している。

葉は根生葉のみで、茎葉は無い。根生葉はロゼット状に株を形成する。葉身は倒卵状円形で理科の実験で使われる葉さじの様な形状。表面からは消化液を分泌する朱赤色の繊毛を纏っている。繊毛の先は丸い。腺毛は葉縁が長い。葉裏には昆虫を捕捉する腺毛は形成しない。昆虫を捕捉すると接触の刺激で葉が巻いて昆虫を包み、粘液で溶かして昆虫から養分を吸収する。粘液には蛋白質分解酵素が含まれている。

花は腋生。根生葉の葉腋から花茎を伸ばし蕾が渦巻き状に着いた卷散花序を形成する。小花は、ガクは5裂し、花弁は白色で5片、雄しべも5個である。雌しべは3個で花柱は深く2裂しV字形に開く。花は下部から咲く。開花には日差しが必要で曇ると花は閉じてしまう。日光を浴びると花弁は平開し、点状に光を反射し磨りガラスの様な質感を呈する。

山歩きを始めた頃、モウセンゴケは湿原でミズゴケと一緒に群生する観葉植物であった。本格的に吾妻連峰の花の撮影を始めてから数年が経過し、谷地平の植物の撮影に集中した時期があった。大倉深沢に至る登山道の一角で白い小さな花の群生が目にとまった。花をつけた株の葉を確認すると見慣れているモウセンゴケの葉であった。葉の赤い腺毛と白い小さな花と垂れ下がった蕾の組み合わせに他の植物にはない新鮮な美しさを感じた。それ以来、夏の湿原を通るとモウセンゴケの花を探す癖がついてしまった。



第155回自然観察会案内：奥土湯自然林陽だまり観察会と総会

日時：2017年11月23日（木）7：30～16：00

集合場所：四季の里交差点正面入口駐車場 集合時間 7:30 参加定員 20名

内容：奥土湯・台が森山麓の登山道を辿り、黒沢まで晩秋の自然林を散策します。午後は「サンスカイ土湯」で総会です。

準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、食器。ストック利用の際は、登山道穿掘防止のため先端カバー装着をお願いします。

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代(500円)

申し込み：11月22日(水)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後7時～9時でお願いします)。メールの際には「全員返信」モードをお願いいたします。

西吾妻登山道誘導ロープ取り下げボランティア作業報告

10月14日(土)に西大巔から西吾妻小屋までの登山道に設置していたロープの取り下げ作業を行いました。参加者は7名でした。西大巔山頂直下の斜面はスゲ類等の湿性植生で覆われた泥炭層と下層が分離し、1平方メートルにも満たない植生の塊が斜面に沿って崩れ落ち、9月の現地調査時より更に崩壊が進行していました。しかし、チシマザサで覆われたところは崩壊を免れている様です。

誘導ロープの設置作業は1999年から継続しており、今年で18年目になります。登山道や水場周辺のロープを設置された区間では一部ですが設置線に沿って植生が回復しつつある様子がようやく認められるようになりました。地道な対策ですが登山者の立ち入りを継続的に抑制

することの有効性が確認されました。作業は順調に進み、いつもより早い時間に西吾妻小屋に到着しました。小屋の前で、天元台方面からの作業を終えたNF米沢の竹田さん達と合流しました。竹田さんに9月26日の現地調査の結果をお伝えしました。竹田さんから6月の作業時に話題になったロープの収納袋をいただきました。感謝です。

下山すると、デコ平では多くの観光客がゴンドラ駅周辺を散策していました。中には犬を連れてデコ平湿原までの散策を楽しんでいる人もいましたが、フンの処理をしている様子は見られません。また駅前広場(?)では花壇も整備されていました。周辺の貴重な自然林に囲まれている中で、これらの行為による生態系攪乱に対するリスクについてどの程度認識されているのか気になるところです。



崩壊は進行中



取り下げ作業



立ち入り抑制による植生回復



立ち入り抑制による植生回復

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第102号 2017年10月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(500円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・小幡